

# Program Note for Ensemble Stage

## Soon (清水大輔作曲)

この曲は演奏会の様々な場面のために用意された三つの作品から成る組曲であり、それぞれ「Start」「A Break」「End」と題されています。本日は、B. Sax の軽快なアドリブソロに始まり、楽しい演奏会の幕開けを告げる第1楽章「Start」、ゆったりとした旋律で充実した演奏会の余韻に浸る第3楽章「End」を演奏いたします。クラシックサクソフォンならではの豊かな響きにご期待ください。(嶋)

【S. Sax 中島、A. Sax 嶋、T. Sax 小山内、B. Sax 吉田】

## 美女と野獣 (アラン・メンケン作曲)

ディズニー不朽の名作『美女と野獣』は、本年実写映画化されたことで話題を呼びました。本日演奏いたしますのは、舞踏会の場面で演奏されている一曲「美女と野獣」です。二人がともに惹かれ合い、手を取り合って踊る姿はあまりにも有名ですので、多くの方がご存知のことでしょう。本日はこの名場面を、柔らかなユーフォニアムの音色で再現いたします。(泰)

【Euph 磯部、小林、泰、中村】

## Wind Quintet Op. 99-2 (フランツ・ダンツィ作曲)

1763年にドイツで生まれたフランツ・ダンツィは、宮廷楽長としてチェロや指揮の才能を発揮し、はたまたオペラや交響曲も多数残すなど、様々な活躍を見せた音楽家です。当時は管楽器の性能が飛躍的に向上した時代。彼の多く残した木管五重奏曲では、緊張感ある祝祭的な明るさをはじめとした様々な曲想の中で、各楽器の魅力が存分に引き出されています。上品で楽しげであり、しかし時折意外な陰も見せる彼の作品を、是非お楽しみください。(藤原)

【Fl 外山、Ob 桜井、Cl 藤原、Hr 佐々木、Fg 小西】

## ドラクエメドレーより (すぎやまこういち作曲)

誰もが知る有名RPG「ドラゴンクエスト」より、ゲーム内に登場する楽曲を金管五重奏編成でお送りします。かの有名な序曲に始まり、勇ましい冒険、穏やかな街での一時、華やかで楽しいカジノと、ドラクエの世界の魅力を伝えられる構成になっています。金管楽器の音色は、勇ましくも華やかなドラクエの曲にぴったりです。是非お楽しみください！(佐藤)

【Tp 尾崎、佐藤、Hr 泰、Trb 濱崎、Tuba 後藤】

## 三匹の猫から Mr. Jums もう一匹の猫 Kraken (クリス・ヘイゼル作曲)

三匹の猫・もう一匹の猫は、70年～80年代にかけて金管アンサンブルで一世を風靡したフィリップ・ジョーンズ・ブラス・アンサンブルの、四匹の猫がモチーフの曲です。本日演奏するミスタージャムズ(三匹の猫の一匹目)のゆったりと流れる高貴なメロディーと、もう一匹の猫クラーク(北欧に伝わる怪獣)のその名とはちょっと違った少しコミカルな曲想から、どんな猫なのだろう？と想像してみてください。きっと楽しく聴けるとおもいます。(齋藤)

【Tp 川口、関、遠野、矢田ヶ谷、Hr 甲斐、Trb 岡田、齋藤、照屋、橋本、Tuba 高橋】



# Program Note for Wind Orchestra Stage

## アパラチアン序曲 (ジェームズ・バーンズ作曲)

吹奏楽作曲界の巨匠ジェームズ・バーンズ (1949 年～) によって 1983 年に作曲された。カナダからアメリカにかけて連なるアパラチア山脈の雄大さを題材とし、同山脈の麓に位置するノースカロライナ州の高校バンドに委嘱された。

この曲の構成は、呈示部 (急)、中間部 (緩)、再現部 (急) のそれぞれに A-B-A 構造が組み込まれた複合三部形式である。この形式は吹奏楽の序曲の中では典型的で、バーンズ氏の代表曲「アルヴァマー序曲」も同様の形式で作曲されている。しかし「アパラチアン序曲」が作曲技法の点で優れているのは、冒頭の序奏や呈示部で力強く示される 4 つの音列 (譜例左) が曲全体を通して共通のモチーフで貫かれている点にある。例えば、中間部はトランペットによる瞑想的なソロから導かれるが、この旋律も冒頭の 4 つの音列から着想を得ていることが窺える (譜例右)。なお、この音列は、リズムや調声を変えながら、曲中に全部で 48 回登場する。

(譜例)	
呈示部	中間部
	

洗練された技法を駆使しながら、自然の雄大さや、それと向き合う人間の内面などが繊細に描かれており、作曲家としての成熟期にあった巨匠の腕前を感じさせる一曲となっている。 (小西)

## ニュー・シネマ・パラダイス (エンニオ・モリコーネ作曲/大島ミチル編曲)

1988 年にイタリア人映画監督ジュゼッペ・トルナトーレが手掛けた同題映画に登場する、「ニュー・シネマ・パラダイス」「愛のテーマ」「初恋」の 3 曲をメドレーにした作品。

「ニュー・シネマ・パラダイス」とは、主人公・トトの故郷、シチリアのジャンカルドにある映画館の名称である。幼少期から映画が大好きだったトトは、映画技師のアルフレードと、親友とも親子ともとれる固い信頼関係をこの映画館で築く。最初に演奏されるこの曲は、この映画館の象徴だといえる。壮年期のトトが 30 年ぶりに帰郷した時も、映画館はこの曲とともに彼を出迎えてくれる。訪れるたびに抱く感情は様々だが、いつも優しくそこに佇む、故郷のテーマでもあるといえよう。

青年期にトトが出会った美女、エレナとの恋が実る瞬間に流れるのが「愛のテーマ」である。しかしエレナとは彼女の両親の反対のために、離れ離れになってしまう。再会のシーンでもこの曲は流れるが、美しいメロディのなかでもどこか切なく、二人の未来を暗示するかのようである。また、アルフレードがトトに遺した、ある思い出深いフィルムをトトが観るときにもこの曲は流れる。恋愛だけではなく映画への愛、アルフレードとの絆も表現した、この映画の山場ともなる曲である。

3 拍子で始まる爽やかな曲は「初恋」である。文字通りエレナとの出会いはもちろん、映画を愛した村の人々の陽気な様子も描かれる。4 拍子に変わった後半からは、トトが故郷を去るシーンで奏される曲である。トトはローマで映画監督として成功を収めることになるが、それはアルフレードの「村を出る。もうお前とは話さない。お前の噂が聞きたい」という言葉によるものだった。故郷との別れは切ないものではあるが、その別れはトトの成長を心から願ったアルフレードの優しさが詰まったものであり、その愛がこの曲には描かれている。 (桜井)



# Program Note for Wind Orchestra Stage

## リバーダンス (ビル・ウィーラン作曲/建部知弘編曲)

アイルランド音楽やアイリッシュ・ダンスを中心とした舞台作品で、1994年に初演されて以来、世界的ブームを巻き起こした。アイルランドの神話や伝承の世界を描いた第1部と、アイルランド民族の他地域への移住とそこでの文化的交流を描いた第2部に分かれており、全体として今日に至るまでのアイルランドの歴史を辿る構成となっている。アイルランドでは、長い間、自国史が「差別と抑圧への抵抗の物語」として描かれてきたのに対し、20世紀末からは、そのような悲観的歴史像とは距離を置きつつ、独自の文化を肯定的に解釈する修正主義史観が生まれており、リバーダンスはそのような修正主義史観の大衆的表現だと位置付けることができる。

本日演奏するのは第1部のラストを飾るシーンであり、以下の4つの曲から構成される。①女性ヴォーカルとコーラスの幻想的な歌声が囁きかける「Cloudsong」、②哀愁を帯びた民謡調のメロディーを背景に妖艶な演舞が繰り広げられる「The Dance of Riverwoman」、③民族打楽器ボランのビートに合わせて軽快に舞う「Earthrise」、④エネルギーッシュな混合拍子(譜例)に合わせてたたみかけるように躍動する大団円の「Riverdance」。

(譜例) 6/8拍子と4/4拍子の混合拍子によって疾走感が生み出される



リバーダンスを彩る民族舞踊や民族楽器は、しばしばアイルランドの伝統文化と称されるが、ここでいう「伝統」とは何だろうか。「伝統」という言葉の響きは、遙か太古から継承されてきたものという印象を与えがちだが、実際には近代以降に創り出されたものが少なくない。とりわけアイルランドやスコットランドのようなケルト地域の「伝統」(例えばタータン・チェック柄やバグパイプなど)は、イングランドとの違いを強調するナショナリズムと密接に絡み合いながら、19世紀後半に造られた。伝統文化は時の経過と共に消滅するのではなく、むしろ生成されるのだといえる。リバーダンスの世界観もまた、現代が創造したアイルランドの「伝統」に他ならない。(小西)

## お知らせ

当楽団は、来夏に第2回定期演奏会を開催する予定です。  
詳細は公式HPからご確認ください。(QRコードご参照)  
Twitter @htwoobogwe Facebook @吹奏楽団 La Foresta



また、当楽団の母体である現役大学生楽団の演奏会へも、ぜひ足をお運びください。

一橋大学津田塾大学吹奏楽団 第41回定期演奏会

2017年12月2日(土) ルネこだいら大ホールにて

指揮：花坂義孝(上野の森ブラス)

曲目：三つのジャポニスム(真島俊夫)ほか



# Program Note for Wind Orchestra Stage

## 「カルミナ・ブラーナ」より（カール・オルフ作曲／ジョン・クランス編曲）

「カルミナ・ブラーナ」とは、ドイツ南部のバイエルンにあるボイエレン修道院で19世紀に発見された写本を編纂した詩歌集のことで、「ボイエレンの歌」を意味する。元の写本は、13世紀頃、当時のボイエレン修道院を訪れた神学生や修道僧によって書かれたものと推測されている。修道院の敬虔なイメージとは裏腹に、歌詞の内容は恋、酒、賭博、性愛など世俗的なものが多い。

作曲家カール・オルフ（1895年～1982年）がこの詩歌集を手に入れたのは、出版からおよそ1世紀を経た1934年だった。古本のカatalogでたまたま詩歌集を見かけたオルフは、この偶然の出会いについて「運命の女神がほほ笑んでくれた」と回想している。中世ドイツの詩歌に創作意欲を駆り立てられたオルフは、詩歌集から24篇を選び、舞台形式による世俗カンタータとして一つの音楽に仕上げた。1936年に完成した約1時間の原曲は、「初春に」「酒場で」「愛の誘い」の3部から構成され、オーケストラ、混声合唱、少年合唱、ソプラノ・テノール・バリトンのソリストからなる大編成である。

吹奏楽編曲では原曲の中から演奏効果の高い13篇が演奏される。中でも冒頭と最後に演奏される「おお、運命の女神よ」は最も有名で、ドラマや映画でも用いられることが少なくない（譜例）。

（譜例）「おお、運命の女神よ」冒頭部分の合唱パート（原曲）。移り気な運命を嘆く幕開け。

The image shows a musical score for the beginning of the choral part of 'O Fortuna'. It is marked 'Pesante' and features a treble and bass clef. The lyrics are: O For-tu-na ve-lut Lu-na sta-tu va-ri-a-bi-lis. The music consists of a series of chords and notes, with a prominent bass line.

以上の冒頭部分及びこれに続く歌詞の意味は次の通りである。

おお、運命の女神よ  
移ろう月のごとく  
汝は常に満ち欠けを繰り返す  
情け容赦ない忌むべき世界  
感情の赴くがままに  
競争、貧困、権力  
氷のごとく溶けていく...

喜怒哀楽の様々な感情に振り回される人間模様と、それを嘲笑するかのような全知全能の存在たる運命とが、曲全体のテーマとして貫かれている。壮大なスケールの超大編を、吹奏楽の力強く繊細なオーケストレーションでお楽しみいただきたい。（小西）

